

Nadeshiko-no-kai Report



東京学芸大学附属 小金井小学校 ● 同窓会

撫子の会

会報 15 号

小学校はエンピツの匂い

会長挨拶

さらに充実した 同窓会とするために

「撫子の会」会長 佐々智樹

同窓会員の皆様には、撫子の会に対して温かい支援とご協力を賜り心から感謝しています。小金井小学校卒業生を中心にした新しい役員体制になって二年。まず始めに取り組む目標として掲げた事は、以下の事でした。

一、同窓会懇親会の毎年開催

二、旧追分小学校記念銘板の設置

三、成美荘養気閣の保守保存協力体制構築
目標実現にあたって明確に見えて来た事がございます。改めて言うまでもなく、同窓会活動とは、卒業生同士の親睦の輪を広げ、同窓生の力を合わせて、母校の伝統ある優れた教育環境を支援し守って行く事です。同窓会は、クラス会や同期会とは異なり、この歴史を持つ母校を大学やなでしこ育成会と力を合わせて支援していくことで、歴史ある優れた教育の一助となることだと考えます。そのためには、

《具体的な力を蓄えることが必要》

具体的な「力」とは資金力を持つ事です。国から国立学校に振り分けられる予算は、

年々削減されています。附属小金井小学校も例外では無く予算の削減に直面しています。近年では各学年四クラスから三クラスに縮小を余儀なくされています。

《百年を超える歴史と一万五千人を超える卒業生が力を合わせる時》

小学校の教育環境を側面から応援すること、さらに至楽荘、一字荘の活用と成美荘の補修、保存に同窓生が協力していくことで、東京学芸大学附属豊島小学校、追分小学校、小金井小学校の歴史ある教育理念を後世に伝えて行くことは、大変重要であると考えます。そのためにも同窓会による母校支援の基金創出を具体的な形でスタートさせる時期に来ているのではないのでしょうか。私立学校などでは、基金を基に充実した教育環境を実現している学校が数多くあります。

撫子の会は、現在、小学校卒業時にお預かりする同窓会費と総会開催時に募る寄附金によつてまかなわれていますが、会報の作成と郵送、そして総会と同窓会の運営費で大半が使われる中での同窓会費の積み上げは容易ではありません。我々同窓生が力を合わせて母校支援の基金を作る時が来たと考えております。

昨年、皆様にご協力を頂きました母校の冷房化施設設置に関する寄附金により、今年の夏から小学生は、快適に授業を受ける環境が整いました。皆様のご協力に心から感謝してご挨拶とさせていただきます。

ご報告と感謝と

小金井昭和五十六年度卒 清水洋岐

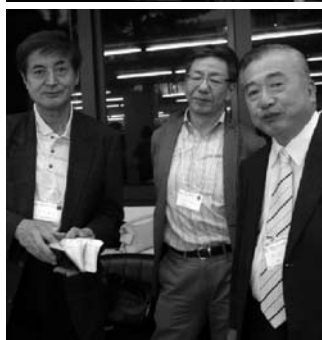
平成二十五年十月十九日土曜日、秋真つ只中の武蔵野は、好天に恵られました。この日は、東京学芸大学附属小金井小学校の「なでしこ運動会」、そして、撫子の会主催の『ぶらり同窓会』の同時開催日でした。

撫子の会の懇親会は、いままで二年に一度、総会の開催年に合わせて隔年での開催としていました。これから更に活動を活性化させる為に、今年から年に一度の開催を定常化すべく、計画しました。年に一度、会員の方々に総会はなくとも、懐かしい母校にぶらりと足を運んで頂き、思いがけない旧友との再会や、恩師への現状報告の場としてご用意させていただきました。

今回、懇親会の大きな特徴は、現役なでしこ達の運動会での活躍を見ていただくことができましたことです。ご参加された会員の皆様の中には、ご自身の経験された運動会の思い出と重ね合わせたり、後輩たちの躍動に感激された方もいらつしやったかと思います。

午後二時過ぎまで、母校で運動会を観戦し、その後、場所を大学の生協ホールに移して、

懇親会を開催しました。母校の校長先生、副校長先生にもご列席いただきました。



新同窓生も参加してくれました！



『ぶらり同窓会』との名前の通り、あえて出席管理もせずに開催したこともあり、出席者が多かったとは言い難いものでしたが、現役の中学生も参加もあり、幅広い年代間の交流ができました。

今年も秋に、総会と懇親会を予定しています。武蔵野の秋を見つけない、ぶらりでかけてみませんか？

母校から・先生から

小金井小学校の思い出

附属小金井小学校元教諭

小金井昭和六十二年卒 三井寿哉

昭和五十五年四月に新一年生として入学した私は、卒業後も小金井小の校舎にお世話になるとは思ってもいませんでした。実際、小金井小学校には児童、職員を含め十九年在籍していたことになり、人生のほぼ半分を過ごしたことになります。校舎は改築されたものの、所々に児童だった頃の面影は残っており、見るたびに当時の思い出やエピソードが蘇ります。そんな思いを還しながら理科の教師として楽しい毎日を子どもたちと過ごせたことはとても幸せなことです。

理科に興味をもったのは小金井小学校のおかげです。四年生で入部した科学クラブです。

はじめは何気ない気持ちでの入部でしたが、年間を通して風力発電の開発を競い合う活動に心を奪われました。説明書もなく、失敗と手応えを繰り返しながら次回までにどんな設計に組み立て直すのかをグループで考え、話し合うことが楽しくてたまりませんでした。そんな思いで、大学では理科教育の道へ進みました。大学三年生に教育実習生として、偶然にも再び小金井小にお世話になり、しかも、理科の小林道正先生が指導教官でした。あたたかいご指導のもと、授業をする面白さや難しさを実感できた貴重な三週間でした。数年後、小金井小の職員として勤務することができたのは大変光栄なことでした。しかし、これまで教わる立場として出入りしていた雰囲気とは全く異なる職員室に緊張感が走りました。先輩の先生方は夜遅くまで研究に勤しみ、子ども達のために努力を惜しまない毎日でした。小金井小の先生方の信念を知らされ、着任当時は正直焦りました。子どもたちや卒業生と陽気に触れ合う先生方の笑顔の裏に、こんなにも背負っているものがあることを目の当たりにしたのです。

それから十二年間、がむしゃらの毎日でした。当時の先輩の先生方にどれだけ近づけたかはわかりませんが、たくさんのことを学び、経験をさせてただけいたことは大きな財産となったのは確かです。

私の十九年に渡る小金井小ライフで最も印

象に残っているのは、やはり至楽荘です。児童として遠泳に初参加し、大きな自信を得ました。二回目は、学生水泳助手として参加し、子どもたちの遠泳の側泳することで、命を預かる責任を感じました。そして、三度目の参加は職員としての引率です。至楽荘生活では子どもたちの目標を叶えるべく、引率の職員が一体となります。職員全員で高学年の子どもたちの成長を見守る。このような経験はなかなかできることではなく、小金井小だからこそ成せる技です。さらには学年主任として荘生活全体を任された時は、多くの子どもたち理想と現実のギャップを学び、新しい課題をもつことに繋がりました。色々な立場で至楽荘生活に参加することができたことは、その後の教員生活に大きく生かされています。

今年度からお茶の水女子大学附属小学校に異動し、新しい学校文化に戸惑いを感じつつも理科専科の教師として楽しく授業を進めています。一つの学校に長く居座ってしまったことによるギャップも痛感しましたが、月日と共に乗り越えました。今は小金井小で学ばせていただいた事を発揮するチャンスだと思っています。新しい文化や研究を吸収しつつ、己を刺激する毎日でありたいと目標を立てています。小金井小が私に教えてくれた自然や科学への興味と夢を、未来の子どもたちにも同じように伝えられる担い手になれるよう、がんばっています。

附属小金井小学校と サッカーの思い出

小金井昭和四十七年卒 柳谷俊郎

今年2014年は、サッカーワールドカップブラジル大会が開催されました。現在の、世界のトッププレイヤーの激しい戦いと、それに比べて日本の戦いに歯がゆい思いをした方も多いと思います。私もその一人でした。五十四歳になっても毎週末にはシニアサッカーの試合をしている『サッカーおやじ』である自分の原点こそが、附属小金井小学校のなでしこサッカークラブなのです。

1960年(昭和三十五年)生まれの私が、初めてサッカーボールに触れたのは、三歳年上の兄が小金井小学校で、担任の先生である腰山太刀男先生にサッカーを教えてもらい始めたことがきっかけでした。気付くと、それまで野球のボールを家の前の壁に向かって投げていた自分は、サッカーボールを蹴り始めていました。毎日毎日です。

小金井小学校では、四年生になると『土曜サッカー』に入るか否かの選択がありました。通常のクラブ活動とは別に、土曜日の午後にサッカーをやりたいものが集まり、練習をす

るという活動でした。これも歴史を紐解けば、日本サッカーにおける草分け的存在である豊島師範の流れを受けてのものでした。日本の学校スポーツとしてのサッカーの師である東京高師の流れをくむ東京の豊島師範と青山師範もまた早くからサッカーの盛んな学校でした。その三校OBによる東京蹴球団を結成し、1921年(大正十年)に第一回天皇杯を制しました。すなわち、土曜サッカーは、日本一の指導者の方々の下に始まった活動でした。

私が五年生になり、土曜サッカーで初めての試合をした時の相手チームは、六年生の女子チームでした。当時背の低かった私にしてみれば、六年女子は大敵でした。その時は、足の速さだけのドリブルで一点を取り、勝つたことを覚えています。現在の女子チームなでしこの原点も土曜サッカーの女子にあったといえるでしょう。

そして、対外試合も始まりました。よみうりランドの少年団サッカー大会です。現在の全国少年サッカー大会のスタートです。五年生での初出場は、六年生チームに大敗して悔しい思いをしましたが、翌年は、五十二チームでベスト四まで勝ち残りました。優勝した上石神井北小との準決勝と、暁星小との三位決定戦に敗れたことを思い出します。チームの皆で、乗り慣れない京王線に乗ってよみうりランドまで行き、出来たばかりの動く歩道



「読売サッカー大会4位(1972年8月10日)」
トロフィーを持っているのが柳谷氏

に乗り、遠足気分です。皆ではしゃぎながら会場に着いたものです。その頃、引率の先生は、先日亡くなられた大場晃先生でした。ハンドボールが専門だった大場先生の指示は、『いかに、柳谷！絶対に負けるな！』というシンブルなものでした。その頃、毎週末に我々は、吉祥寺の日産厚生園に集まり、自主練習をしていました。東方、浅野、加藤、酒井などと

いった仲間たちと、観たばかりのダイヤモンドサッカーのプレイを手本に、私は、イングランドのサッカー教本から練習で使えるものを選んで、小学生なりにメニューを考えていました。『サッカーは走りながら考え、考えながら走る。さらに、仲間とどのようにつながるか。』といったことを自然と身に付けていったのだと思います。

自分は、毎年の文集に『将来の目標は、プロサッカー選手になること』と書いていました。1971年にアジアユース大会が、国立競技場で開催され、地元日本とインドの対戦する初戦に、なでしこサッカークラブは前座試合を務めました。残念だったのは、主役は六年生で、随行した四人の五年生の一人である自分は球拾いで終わりました。それでも、国立競技場の控室からグラウンドに出ることの興奮は忘れられない思い出となりました。

そして、元旦には、クラブの同級生で天皇杯決勝戦を観戦、憧れの釜本邦茂選手のゴールでヤンマーが優勝したときは、グラウンドに降りて、釜本選手の横で万歳をしていました。

あれから四十年以上の月日が経ってもサッカーの一瞬一瞬は忘れられません。常に仲間がいました。そしてその仲間と今も一緒にボールを蹴っていることも幸せなことでしょう。四十を過ぎて入会した、シニアサッカーの草分けである、四十雀クラブ東京には、1968年メキシコ五輪の日本代表監督長

沼健さん(故人)や岡野俊一郎さんがメンバーにいらつしました。私は今、そのクラブの会長になり、これからの年代を超えたサッカーの発展を考えるようになりました。あの関東赤土の第三グラウンドで始めた、なでしこサッカークラブから、ようやくサッカーにお返しが出来るようになってきたのかもしれない。私だけではなく、多くの先輩、後輩の皆様方が、あの附属小学校でのサッカーから



《ぶらり同窓会》では、なでしこサッカーの歴代メンバーによる記念撮影

学んできたことがあると思います。また皆と語らう機会があれば何と幸せなことでしょう。

新企画●音楽委員会

田中準先生と 音楽委員会の思い出

小金井昭和四十六年卒 尾崎郁子

四年生になると、委員会活動が始まりました。通常は自分が希望する委員会を出して、人数調整の上、決まりますが、音楽委員会だけは、顧問の田中準先生から打診がありました。田中準先生と言えば、泣く子も黙るげんこつ(口元にグーを持ってきてハーツと息を吹きかけてゴツンが定番でした)が名物でしたが、あの田中先生からお声がけいただくのは、それはそれは名誉なことでした。私も名前を呼ばれたときには、飛び上がるほど嬉しかったのを覚えています。

委員会活動がスタートしてからしばらくして、パートの発表があり、大太鼓、小太鼓の楽器担当以外は、自分専用のアコーディオンを受け取りました。私は、その頃から「縁の下のなんとかタイプ」だったようで、メロディパートよりも伴奏パートに憧れていました。

田中先生から「ソプラノ」に指名された時には正直がっかりしました。ソプラノのアカordeイオンの色が大好きな赤だという単純な理由で、やっと気持ちが収まりました。

アカordeイオンは、蛇腹で中の空気を抜いたり入れたりすることで音が出る楽器ですが、鍵盤を押さえるタイミングとはちよつと遅れて音が出るので、慣れるまではみんな德音を合わせるのが難しかったように思います。最初はバラバラだったアカordeイオンの音が揃って、打楽器がピリツと締めてくれるようになると合奏の面白さを感じられるようになりました。そうは言っても、普段演奏する曲は、行進曲、校歌と君が代くらいだったので、次第に反復練習に飽きてきて、朝練もめんどくさいと思うようになりました。

そんな頃、田中先生は、突然バッハの曲を持ち込まれました。それは、「平均率曲集」の中の「フーガ」の一曲で、メインテーマとなるメロディが、四声で追いかけてこのように出てくるものでした。小学校の高学年では平均率をピアノで独奏するのは難しく、楽譜通りに指を動かすだけで精一杯ですが、アンサンブルで合わせると、メロディの掛け合いが会話のように流れるのが聞こえてきます。この時初めてバッハが生んだ旋律の美しさに感動しました。

そして、この曲を小金井公会堂で演奏する機会に恵まれました。合同演奏会だったの

か、コンクールだったのか今となつては覚えておりませんが、鮮明に記憶していることが一つだけあります。本番の舞台の上で、田中先生が指揮棒を振って、出だしの合図を確認しようとしたときのこと。先生が指揮棒を振り上げた瞬間に、私は、本当に演奏が始まるのだと勘違いして、「ソツ」と鋭く鳴らしてしまいました。田中先生の動きは一瞬止まり、それから先生の首から上が紅潮してきました。私は、げんこつが降ってくる！と体を固くしました。ところが、先生は赤い顔で立ったまま、笑っていらっしゃいました。私は、

恥ずかしさと申し訳なさで全身が火照り、先生以上に赤くなつていたと思います。

田中先生にご指導いただいた音楽委員会での三年間は、コツコツ練習を重ねて味わう達成感、ひとりひとりの力が共鳴し合い集団としての魅力に酔う醍醐味、真剣に何かに取り組んでいるという自尊心、そういったものを育んでくださったと思います。

そして、あれから約四十年が経ち、娘のピアノの発表会では、毎年親子で連弾し、楽しく火照ることができるのは、田中先生からの粋なギフトなのかもしれません。

「創立 100 周年記念誌」より



音楽朝会をNHKテレビ放映
(昭和50年)

発見と感動の 一宇荘生活

附属小金井小学校副校長 関田義博

現在、子どもたちは中央線のスーパーあずさ号を利用して一宇荘へ行きます。十時三十分には八王子駅を出発した特急は、十二時に茅野駅に到着します。茅野駅からは貸切バスで一宇荘へ向かいますが、八王子を出てわずか



二時間足らずで一宇荘に着いてしまいます。一宇荘生活での最大のイベントは、六年生の蓼科山登山です。海拔0メートルの鶴原湾を泳ぎ切った子どもたちが、その二か月後、今度は仲間と力を合わせて標高二五三〇メートルの山頂を目指します。途中、小屋のある將軍平から上は九月でも紅葉が始まり、晴天の日に頂上を極めると、自分たちが地球の主役になったような爽快感と達成感を味わうことができます。山頂での記念撮影は、四年間の荘生活の修了式のようにもあります。

四、六年と一宇荘で三年間かけて行う「あおぞら活動」では、子どもたちが思い思いのテーマを持って自然調べ活動に取り組みます。我々引率教員は、子どもたちに寄り添いつつ活動の安全を確保するようになっています。脇目も振らずに活動に取り組む子どもたちからは、毎年いろいろなことを教えてもらっています。最近では、一宇荘周辺の岩石を割ると、「黄鉄鉱」という金のような鉱物を発見できることを教えてもらいました。引率している私自身が、新たな発見を繰り返すことで、一宇荘の自然に完全に魅せられてしまっています。

行ってきました、

一宇荘

小金井昭和四十六年卒 鴨下隆一

風薫る五月二十四、二十五日、昭和四十六年卒早川、桜町、鴨下、五十一年卒丸森の年次混成部隊が一宇荘へ「大人の林間学校」を挙行！

小学生の時よりキツイ登りに感じられた千代田湖への道のり一時間。野鳥の声を聞きながら、昔話に花が咲きました。



※一宇荘・至楽荘へは、同窓生が含まれれば、どなたでも夕食・朝食付で宿泊できます。お問い合わせは、豊島修練会へ（電話：042-471-6600）

おたまじやくし採りや 田植え、芋ほりをした

成美荘が今！

豊島昭和三十五年卒 柴田通彦

撫子の会同窓生の皆さん、特に豊島小学校卒業生の皆さんにとっては、小学校入学間もないころから卒業までの間、食用ガエルの大さなおたまじやくし採りをしたり、田植えや芋ほり体験など、折々に自然いっぱいの中で体験した成美荘生活には、未だに多くの思い出が詰まっていると思います。

その成美荘ですが、初めて親元を離れてお泊りした建物（「養気閣」といいます）を始め、周辺の雑木林等は、間近まで住宅地が迫っているものの、まだ当時の面影を残したまま（さすがにおたまじやくし採りをした沼はもうありませんが）、東久留米の地に存在しております。

現在は周辺一帯の所有・管理は学芸大学が基本的に行っておりますが、養気閣の建物は老朽化が激しく、立ち入りが出来ない状態にあります。そこで大学としても建物の修復保存と周辺の活用についてどうするか、学内

関係者の間で動きが始まりつつあります。

撫子の会としても、同窓生の幼き日の思い出がいっぱい詰まった成美荘の保存・活用活動に何らかのかたちで関わっていけたらと考えております。

同窓生の皆さんにおかれまして、そうした動きを見守りつつ、保存・活用についてアイデアがございましたら、同窓会役員までお知らせください。

学芸大学では様々な検討がはじめられています。



シンポジウム開催のご案内「成美荘を考える」

日時：2013年12月11日（水） 15:00～16:00（15:30開場）
 場所：成美教育文化会館 成美グリーンホール
 《東久留米市東久留米1-14 東京学芸大学 特別支援学校となり》
 後援・協賛： 成美教育文化会館 豊島区 元東京豊島区立和野小学校校長
 小森伸一 東京学芸大学 准教授／教外・環境教育
 同会・後援 成美会館、東京学芸大学 准教授／建築デザイン、まちづくり

パネリスト（予定）
 藤井雄志 東京学芸大学 大学受審科部長
 横山正 成美教育文化会館 館長、元東京豊島区立和野小学校校長
 小森伸一 東京学芸大学 准教授／教外・環境教育
 同会・後援 成美会館、東京学芸大学 准教授／建築デザイン、まちづくり

東京学芸大学の東久留米キャンパスは、東京府豊島郡稲佐村に、昭和11年に「自然を通して、楽しく、強く、美しく、人間教育の道場『成美荘。』」として開校したもので、以来、在学を通して、多くの教育者を輩出してきまし、現在、その成美荘の跡であった「養気閣（現在、建物等は成美荘）は近年、特別支援学校の施設として、大学生の実習サロンの活用などにも使用されてきましたが、2012年4月の地震で建物被害を受けました。大学は緊急復旧したものの、施設関係者の安全確保が保障できない理由から、現在一時的に使用を控えています。建物の修復は急務です。

歴史的建築物が建物の歴史のある地に存在しつづけることは、我が国の近代化発展の重要な文化財となす同時に、自然教育の場としての存在意義は大きなものがあります。2013年、本学の職員調査チーム（建築・設計・環境・文化財・歴史・教育・施設・広報・社会連携・成美会館・成美会館）は、目録調査と検討会を開き、建物保存活用に関する課題があることを調査チームで確認しました。

上記のような背景から、東京学芸大学 平成25年度重点研究費により「特別支援時代の歴史的建築物の保存・活用に向けた基礎的研究」として、建設当時の報告書等の復旧を資料として、多くの人と当該施設及び建物の歴史的価値などを確認するとともに、議論を行う場を設けていきたいと考えています。

藤井雄志 東京学芸大学 准教授／建築デザイン
 東京学芸大学 平成25年度重点研究費「特別支援時代の歴史的建築物の保存・活用に向けた基礎的研究」

※懐かしい写真、思い出の写真を
お寄せください。

・ 小金井小の謎の壁画



この壁画の由来をご存じでしょうか？
答えは次号にて。（えっ、一年後？）

・ 豊島校校舎



・ 箱根一字荘



一字荘は、昔は箱根にありました。

追分校記念銘板設置のご報告

追分二十五年卒 金子修也

このたび附属追分校発祥の地に銘板を設置できたことは、私ども追分校で学んだ者にとつて嬉しい限りです。この銘板が設置できたのは、実に多くの方々のご理解とお力添えがあつてのことでした。この実現にお力添え下さつた関係各位に、母校の先生方に、またその実現に端緒を開き予算化し推進して下さい。感謝いたします。

話のそもそものは、撫子の会の理事会で、「そういうえば追分校の発祥記念碑がない。建てようよ。」という追分校出身の私にすれば涙が

出るほど嬉しい提案があつたのが発端でした。

昭和十二年生まれの私は、十九年に追分国民学校に入学しました。その翌年、追分国民学校は都から国に移管されて附属になりました。ですから私は明治に始まる追分尋常小学校最後の入学生で、ネイティブであるわけです。その国民学校が、戦争末期に戦地で多くの男性教師を失い教員の養成を国家的急務とし女子師範学校とこれに併う附属校の増設を要した国情を挟んで、附属校になりました。

一方、戦災で多くの学校を焼失した東京は校舎不足に陥り、戦災を免れた追分校舎は貴重な存在であつた訳です。都から国に移管された校舎でしたが、戦後の行政改革で公立学校は都から区に移管されましたから、「追分

校舎は潜在的には区の校舎だ」と主張する人も町にはいて、まして校舎で苦勞する文京六中もあり「校舎返せ」運動があり、ネイティブは学校と地域の間に挟まれました。このように、附属追分校には様々な経緯がありましたから、「ここに附属追分校発祥せり」と記銘するだけでは「何のことやら」。適切な例えかわかりませんが、売却した土地



東京学芸大学 附属追分小学校・中学校 発祥の地



太平洋戦争中(1941～45年)、日本は多くの男性教師を戦場で失い、教員の養成が国家的急務になった。そのため終戦も間近な1945年4月、追分国民学校は国に移管され、女子師範学校の拡充に併せて教育実習のための附属校として開設された。その必要は戦後も続き、1947年の六三制施行にともない高等科を廃し附属追分中学校が開設され、また、1951年に師範学校が東京学芸大学となるのに伴い同学附属となり、ほかさまざまな経緯があつたのち、1954年に附属追分中学校が附属竹早中学校に、1961年に附属追分小学校が同豊島校と共に附属小金井小学校に、それぞれ合併移校を完了し、校舎は文京区に戻り、この地で本校と文京区と地域がともにした戦中戦後の一時代が終りを告げた。これを記しこの碑板を設置する。

2014(平成26)年5月建之

東京学芸大学 附属小金井小学校同窓会く撫子の会・附属竹早中学校同窓会

に建った他所様の玄関脇に、ここは元は私の家だったから表札を付けさせろ、というのでは失礼な話で、当方のエゴイズムでしかありません。

ですから、区の歴史パネルと並んで内容を棲み分けながら繋がりを持つ、そのような「発祥の地」の記念銘板でありたいと考えました。また、歴史は感情やイデオロギーに囚われることなく事実を正確に述べるところにある、とも考えました。そして、文京区教育推進課の皆様は、当方のそのような考えを実に暖かなお気持ちでご理解くださり、打合せを重ねて下さいました。

ところで、附属追分小学校は、1959年（昭和三十四年）から児童の募集をやめ、その三年後の1961年に閉校式を行い、

残った四・五・六年生を小金井ではなく竹早に移した経緯があります。そのため附属追分小は竹早に移校したかのような印象が残り、竹早なのか小金井なのか釈然としないでした方も少なくないようです。しかしこの度の建立はそうした曖昧な気分を払拭し、附属追分小・中学校のルーツとアイデンティティーをはっきり認識できるようにしました。

記念銘板が設置されたコーナーはなかなかいいものです。文京区教育委員会のパネルが遠く明治を源流とする追分尋常小学校から追分国民学校までの歴史を示し、それを受けて私どものパネルが附属追分小・中学校の発祥物語と、さらに小学校が小金井に、中学校が竹早に再生したことを語り、そして、この間に文京六中の校舎難が交叉したことなどを

淡々と示していて、二つのパネルは絵巻物の前編と後編のように独立しながら関わり合っています。しかもそこに追分町の「町名の由来」が、土地神様を祀る神棚のように加わり、これらの三つが並ぶことで、文京区追分の地の「歴史の記念ウオール」を成しています。追分校卒の皆さん、次のクラス会はこの本郷で開いて、是非皆さんで「歴史の記念ウオール」を訪れていただき、そして、今は小金井で、竹早で、皆さんの可愛い後輩たちが学んでいることに思いを寄せてください。



平成25年度寄附金納入者（敬称略・平成25年10月31日現在）

豊島昭和10年卒	石坂誠一	豊島昭和20年卒	福田 満	豊島昭和33年卒	河合敏子	追分昭和34年卒	麻生秀子	小井井昭和53年卒	小蘭江郁子
豊島昭和12年卒	水野静子	豊島昭和21年卒	清水敦子	豊島昭和33年卒	栗崎孝彦	追分昭和34年卒	高柳道治	小井井昭和53年卒	坂井洋一郎
豊島昭和12年卒	河野恭子	豊島昭和21年卒	岡澤祐吉	豊島昭和34年卒	小山 實	追分昭和34年卒	竹内明輝	小井井昭和56年卒	白石昌靖
豊島昭和13年卒	谷川幸子	豊島昭和22年卒	椎名國雄	豊島昭和34年卒	奥貫順子	追分昭和34年卒	山村道子	小井井昭和56年卒	栗原有里恵
豊島昭和14年卒	坂津直明	豊島昭和22年卒	大久保靖彦	豊島昭和35年卒	柴田通彦	追分昭和37年卒	伊藤悦子	小井井昭和56年卒	吉田美穂子
豊島昭和14年卒	高田都一郎	豊島昭和22年卒	田崎禮子	豊島昭和35年卒	宇津木悦子	追分昭和38年卒	山本裕美	小井井昭和56年卒	小西彰子
豊島昭和14年卒	栗原幸一	豊島昭和22年卒	田崎 功	豊島昭和35年卒	加藤道子	小井井昭和39年卒	山崎恵子	小井井昭和57年卒	前田澄子
豊島昭和14年卒	田村 献	豊島昭和22年卒	浜野喜代子	豊島昭和35年卒	田畑利仁	小井井昭和39年卒	内川弘美	小井井昭和59年卒	木下 樹
豊島昭和15年卒	土屋英男	豊島昭和23年卒	三宅哲也	豊島昭和35年卒	古正嘉恵	小井井昭和39年卒	神谷 正	小井井昭和60年卒	根本能里子
豊島昭和15年卒	澤田廣子	豊島昭和23年卒	本多照昌	豊島昭和36年卒	鈴木栄子	小井井昭和40年卒	藤枝伊都子	小井井昭和60年卒	榎本雅子
豊島昭和15年卒	金井泰三	豊島昭和23年卒	飯塚和子	豊島昭和37年卒	萩原博芳	小井井昭和41年卒	鈴木 弘	小井井昭和62年卒	南條加奈
豊島昭和15年卒	辻 泰	豊島昭和23年卒	三浦靖夫	豊島昭和37年卒	萩原保夫	小井井昭和41年卒	川田紀雄	小井井昭和63年卒	廣瀬智江
豊島昭和15年卒	高木正英	豊島昭和23年卒	波多野梗子	豊島昭和37年卒	飯田悦功	小井井昭和41年卒	新藤直子	小井井昭和63年卒	中田尚博
豊島昭和16年卒	樋田並照	豊島昭和23年卒	西岡節子	豊島昭和37年卒	北村貞幸	小井井昭和42年卒	高坂憲二郎	小井井平成元年卒	小野口海樹
豊島昭和16年卒	岩本若葉	豊島昭和23年卒	井上 毅	豊島昭和37年卒	木口桃子	小井井昭和42年卒	夏目 雅	小井井平成3年卒	戸島研三
豊島昭和16年卒	藤井 宏	豊島昭和24年卒	木村 宏	豊島昭和39年卒	武井優子	小井井昭和42年卒	岡村龍吾	小井井平成5年卒	大石庸介
豊島昭和16年卒	高木美典	豊島昭和24年卒	河合桂子	豊島昭和39年卒	磯 源喜	小井井昭和42年卒	森本由起子	小井井平成7年卒	久保奈々恵
豊島昭和16年卒	根本春美子	豊島昭和24年卒	加藤友衛	豊島昭和39年卒	渡辺 成	小井井昭和42年卒	甘利庸子	小井井平成7年卒	掛田千春
豊島昭和17年卒	大橋 宏	豊島昭和25年卒	水野忠俊	追分昭和25年卒	荒川静乃	小井井昭和42年卒	中村けい子	小井井平成7年卒	市塚 潤
豊島昭和17年卒	福島通夫	豊島昭和25年卒	磯部雄彦	追分昭和25年卒	大谷久夫	小井井昭和43年卒	清水直美	小井井平成8年卒	佐久秀弥
豊島昭和17年卒	山内幸子	豊島昭和27年卒	高橋正紘	追分昭和26年卒	藤澤治美	小井井昭和44年卒	井野啓子	小井井平成8年卒	大川優香
豊島昭和17年卒	寺田せつ子	豊島昭和27年卒	鈴木寛子	追分昭和26年卒	野木紀子	小井井昭和44年卒	関口育男	小井井平成10年卒	篠木光洋
豊島昭和17年卒	菊池桂子	豊島昭和27年卒	山本祐義	追分昭和26年卒	大手 栄	小井井昭和44年卒	山川義介	小井井平成10年卒	山下大輝
豊島昭和17年卒	宇田川和俊	豊島昭和28年卒	榎田 温	追分昭和27年卒	德江弘伸	小井井昭和45年卒	阿部素子	小井井平成10年卒	山井紗也香
豊島昭和18年卒	永嶋達雄	豊島昭和28年卒	中原典夫	追分昭和27年卒	上田亮乃	小井井昭和45年卒	牛嶋純子	小井井平成12年卒	松山由佳
豊島昭和18年卒	唐澤俊二郎	豊島昭和28年卒	尾股洋一	追分昭和27年卒	永藤苗里	小井井昭和46年卒	堤 英明	小井井平成14年卒	市塚 諒
豊島昭和18年卒	佐藤正之	豊島昭和28年卒	山岸 巖	追分昭和28年卒	牛久保節子	小井井昭和46年卒	高木真人	小井井平成15年卒	浜野友莉恵
豊島昭和18年卒	島崎 淳	豊島昭和28年卒	外池百合子	追分昭和28年卒	櫻井宏子	小井井昭和46年卒	久保島 嘉	小井井平成15年卒	舟木千馬
豊島昭和18年卒	河北綾子	豊島昭和29年卒	保坂俊文	追分昭和30年卒	松下真美	小井井昭和46年卒	鴨下降一	小井井平成16年卒	高島湧気
豊島昭和18年卒	山谷弘子	豊島昭和29年卒	岩城百合子	追分昭和30年卒	山川明子	小井井昭和46年卒	矢野昌美	小井井平成17年卒	山井健太郎
豊島昭和18年卒	山谷 涉	豊島昭和30年卒	石 博光	追分昭和30年卒	上原保子	小井井昭和46年卒	樹林ゆう子	小井井平成17年卒	池上慧介
豊島昭和18年卒	窪田耕一	豊島昭和30年卒	岩田恭子	追分昭和30年卒	安積宏子	小井井昭和46年卒	宮下真美	小井井平成21年卒	佐藤祐太郎
豊島昭和18年卒	寺田近雄	豊島昭和30年卒	大鹿晏弘	追分昭和31年卒	小幡利江	小井井昭和46年卒	保田宗良	教諭	佐島群巳
豊島昭和18年卒	三浦忠彦	豊島昭和30年卒	高井延幸	追分昭和32年卒	一井敦子	小井井昭和48年卒	工藤勝代		福田梅生
豊島昭和18年卒	井上 勝	豊島昭和30年卒	桶本貴子	追分昭和32年卒	岩崎 嵩	小井井昭和49年卒	菅野理恵子		高浦 浩
豊島昭和18年卒	石崎津義男	豊島昭和31年卒	西畑千佳子	追分昭和32年卒	井口孝俊	小井井昭和49年卒	高野泰彦		高浦由美子
豊島昭和19年卒	清水昭雄	豊島昭和31年卒	河西 直	追分昭和32年卒	岡村悠江	小井井昭和51年卒	林 亜紀子		小西真理子
豊島昭和19年卒	藤田暉夫	豊島昭和31年卒	藤城 悠	追分昭和32年卒	加藤允子	小井井昭和51年卒	丸森康平		島澤 郎
豊島昭和19年卒	梅田明男	豊島昭和31年卒	中村俣子	追分昭和33年卒	坪田悦子	小井井昭和51年卒	岩崎真紀		
豊島昭和19年卒	山下洋子	豊島昭和32年卒	鎌田寿彦	追分昭和33年卒	山佐和雄	小井井昭和51年卒	尾崎佐織		
豊島昭和20年卒	八田暁子	豊島昭和33年卒	彦坂一雄	追分昭和33年卒	宮部一弘	小井井昭和52年卒	斎藤浩一		
豊島昭和20年卒	片山澄子	豊島昭和33年卒	佐々木裕子	追分昭和34年卒	倉根理一	小井井昭和52年卒	柳下真理子		

●「撫子の会」からのお知らせ

▽第十回総会および懇親会開催

- ・日時＝平成二十六年十月十八日（土）
- ・総会＝午後三時から
- ・懇親会＝午後三時四十分から
- ・場所＝附属小金井小学校食堂一階
- ・会費＝二十歳以上 二千元
（懇親会費を含みます。）
- ・二十歳未満 無料

▽ホームページ担当からのお知らせ

- ・同窓会ホームページもリニューアル中です。

<http://www.nadeshikonokai.jp>

新たに、各期の同窓会情報、同窓生の現在などのほか、過去の学校生活にまつわる資料、情報、エピソードなどの他、会報で紹介しきれなかった記事や写真もフォローアップ予定です。

情報は
nadeshiko@nadeshikonokai.jp まで。

▽会報への寄稿のお願い

・皆さんと創る会報を目指しています。クラス会・同窓の仲間の集い、母校の歴史ほか何でも。まずは左記にお申出ください。

川田 紀雄 電話 042-324-9912

野久尾 悟 電話 03-3720-8023

メールアドレス

nadeshikokaiho2013@gmail.com

豊島・追分・小金井の三校の歴史を紡いでいく、連続企画：「なでしこサッカー」「音楽委員会」をスタートさせています。

先生方や仲間との思い出、「土曜サッカー」「なでしこ音楽会」などについても情報をお寄せください。

「水泳」企画も準備中です。



●編集後記

思わず手に取って読みたくなるような会報、それが目標である。懐かしさだけでなく、驚きや発見に満ちたものにできないか。「それなら私も」と参加してみたくなるような企画立てにできないものか。アイデアは一杯ある。しかし時間がない。そして今宵も就寝前にパソコンに向かう。

（野久尾 記）

「撫子の会」会報・15号

発行 平成 26(2014) 年 9 月
編集 野久尾 悟
編纂 金子 修也
印刷 山信印刷

投稿寄稿問合せ先

川田 紀雄（電：042-324-9912）
野久尾 悟（電：03-3720-8023）

同窓会事務局

東京学芸大学附属小金井小学校内
〒184-8501

東京都小金井市貫井北町 4-1-1

電話：042-329-7823

ファクス：042-329-7826

撫子の会郵便振替口座：00100-8-709121

加入者名：撫子の会